

保育者養成におけるピアノ初心者に対する指導

吉村 淳子*

新見公立短期大学幼児教育学科

(2014年11月19日受理)

本研究は、入学時にピアノ初心者である学生に対するピアノ指導の検討を試みたものである。保育者になるためには、2年間という短期間でピアノの基礎技術と基本的な音楽知識、さらに弾き歌いの技術を習得しなければならない。しかし、これはピアノ初心者の学生にとっては、非常にハードルの高い目標であり精神的な負担感も多い。そこで、限られ期間でこれらの知識と技術を習得できる可能性のあるピアノ教本を新たに導入し、それを活用した指導を試みた。その結果、学生は、練習過程で様々なつまづきや困難を感じながらも、1年終了時には、「楽しみながら練習できた」、「難しいと感じることが多かったがやってよかった」、また「弾き歌いの伴奏に役立つ」など、非常にポジティブな感想が得られた。反面、指導者である教員は、「テクニック」の習得を重要視しているため、テクニックをつけるということに対する物足りなさを感じており、習う側の学生と指導する側の教員との捉え方の大きな相違が浮き彫りとなった。これらのことから、ピアノ初心者に対する指導には、基礎的技術の習得に偏ることなく学生に達成感や満足感を持たせること、さらに自己効力感を育てることの必要性が示唆された。

(キーワード) 保育者養成, ピアノ指導, 自己効力感, 達成感

1. はじめに

保育者養成機関である本学幼児教育学科に入学する学生にとって、ピアノを学ぶ目的は、保育現場で対応できるピアノ技術と音楽知識の習得にある。具体的には、「子どもの歌の伴奏ができる」「弾き歌いができる」「簡単な動きの伴奏ができる」などである。

しかし、入学時にピアノ未経験者および初心者である学生にとっては、これらは非常にハードルの高い目標である。ピアノ未経験者にとっては、読譜や楽譜を見ながら両手の指を動かすことは非常に困難なことである。このような学生が、2年間という限られた期間で、ピアノの基礎技術を習得し、さらに子どもの歌の伴奏や弾き歌いができるようになるためには、学生自身の努力と指導者の指導力が問われることになる。

ピアノの授業を受ける上で、初心者、とりわけピアノ未経験者の学生が抱える問題点として次のことが考えられる。まず、ピアノの授業は、スタートラインが同じではない。ピアノ未経験者は、当然ながらピアノを弾くのは初めてである。しかし、ピアノ経験者は、入学時にすでにソナチネやソナタ、モーツァルトやベートーヴェン、さらにはショパンやドビュッシーといった高度な曲目が弾ける学生もいる。このスタートラインでの差は、ピアノ

初心者学生にとっては大きな心理的負担を抱えることになる。さまざまなレベルの学生たちと同じスタートラインに立ち、授業を受けることは、焦りを感じるとともに不安感や負担感を感じ、さらには劣等感を抱くことにもなると考えられる。また、ピアノの授業は、レッスン室で1対1の個人レッスンという形式で行われるため、今まで経験したことのない強い緊張を感じるとともに、それが苦痛になり、さらには恐怖感を感じるということもある。

このように、ピアノの授業は、初心者学生にとっては非常に心理的負担の大きいものとなっている。

また、ピアノを弾くという行為は、左右の手が別々の動きをするとともに、指1本ずつが独立して動かなければならない。なかでも、20歳前後の男子学生は、筋肉が硬くなっており、思うように動かすことが困難な場合もある。このように、ピアノ技術の習得は、器用・不器用などの身体的個人差が大きく影響するのである。

さらに、過密なカリキュラムの関係で練習時間の十分な確保が難しいという物理的な問題もある。少ない時間をやりくりして、練習時間を作り出すことも重要なことである。

さらに、どの技術の習得も同様であるが、地道な努力を重ねなければならないという粘り強い精神力が必要と

*連絡先: 吉村淳子 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

なる。

このように、初心者ピアノの習得には心理的・身体的、物理的、精神的という4つの問題が含まれるといえよう。

また、指導者は初心者学生に1年間という限られた期間で音楽の基本的な知識とピアノの基礎技術を教えることはならない。そのため、学生が授業内容を理解し技術が十分身に着くのを待つ時間もなく、つぎつぎと新しい課題を教えていかなければならないという状況に置かれている。さらに、楽譜通りに弾けるというだけではなく、あわせて音楽表現を伴う演奏力を身につけさせなければならない。

そこで、限られた時間の中で、なるべく多くのピアノの基礎技術および知識の習得ができること、さらにピアノの初心者であっても歌の伴奏ができ、弾き歌いができることを目指してピアノ教材の検討を行い、2013年度の入学生よりピアノ未経験者の学生に対して「おとなのためのピアノ教本1・2」¹⁾の教本を導入することとした。

今回は、この「おとなのためのピアノ教本」を用いて1年間履修したピアノ未経験者の学生への調査と、指導した教員への聞き取り調査をもとにピアノ未経験者へのピアノ指導について検討した。

2. 研究方法

ピアノ未経験者に対して、従来使用していた『大人のバイエル』（全音楽譜出版社）『大学ピアノ教本』（教育芸術社）から『おとなのためのピアノ教本』（橋本晃一編、ドレミ出版社）に変更した。その使用結果として、学生と指導した教員に対して簡単なアンケートを実施した。その内容は、学生に対しては、教本を使用して難しいと感じたところ、つまづいたと感じたところ、弾き歌いへの移行に役立ったか、教本を使用した感想などの項目である。教員に対しては、指導するうえで難しかったところ、学生がつまづいたと感じたところ、全体的な感想などの項目であった。

調査対象は、「おとなのためのピアノ教本」を使用したピアノ未経験者20人（履修者総数54人）および指導者5人であった。

3. 「おとなのためのピアノ教本」の特徴

この教本の冒頭には、「少しぐらいつらくても基礎をみっちりやらないと上達は望めません。困難を克服してこそ真の喜びをえることができるのです——なんていうことをできるだけなくそう」、さらに、「最初から楽しく弾ける、すぐに知っているメロディが弾ける、1曲進むごとに新しい知識と技術が身につく」²⁾と記されている。

従来のピアノ教本は、終始練習曲ばかりを練習するよ

うになっている。しかし、この教本は、先述したように練習曲と聞いたことのある曲を組み合わせで用いながら、基本的なテクニックの練習や音楽の知識が学べるよう作られている。また、最大の特徴は、最初の練習曲から指導者が一緒に弾く伴奏譜がついており、いきなりピアノ連弾ができるようになっていることである。この連弾形式の練習曲は、初めてピアノを弾く学生のぎこちない練習曲も指導者が伴奏をつけることで、音楽的な演奏に聞こえるのである。これは、学生にとっては自分の実際の演奏よりも数倍上手に感じることができ、ピアノを弾くことが楽しく感じられる体験となる。

ピアノ連弾で弾いた時の学生の反応は、目が輝きとてもうれしそうな表情になる。そして、学生自身からも思わず「すごい」という言葉がもれることもあり、ピアノが弾けたことにうれしさや喜びを感じている様子がうかがえる。このような経験から「もっとピアノが弾けるようになりたい」という思いや、「ピアノが上手になりたい」という思いが芽生え、その気持ちは練習意欲につながると考えられる。

また、「コードネーム」も、ピアノの最も基礎の段階から習得できるようになっている。教本1の初めの段階でC・F・G・G7という基本のコードを学習するようになり、それと同時に、伴奏形のバリエーションも学ぶよう編集されている。音楽理論的に、コードネームを理解するのは初心者学生にとっては難しいことかもしれないが、理論のみではなくピアノの鍵盤を前にして、実際に弾きながら学習することによって学びやすくなっていると思われる。

このように、さまざまな基礎的技術と知識を既存のよく知っている曲を使用しながら習得できるよう工夫された教本である。

4. 教本を使用した結果および考察

今回教材として使用した「おとなのためのピアノ教本」は、本学では初めて導入したものであり、指導者自身も初めて使用するものであった。

この教本を進めていく中で、学生自身が「つまづいた」と感じたところを以下に示した。

- 1) 付点4分音符・付点8分音符
- 2) 8分の6拍子
- 3) 指の移動
- 4) 装飾音
- 5) スタッカート
- 6) 教本が1から2になるところ

一方、教員が「学生がつまづいた」と感じたところを以下に示した。

- 1) 付点4分音符

- 2) 最初から両手で弾くので、個人差が大きい
- 3) 半音階が出てくるところとなっていた。

この教本を使って練習をしていく中で、「つまずいた」と感じたことに関して、教員と学生の認識に大きなずれがあることが判明した。

学生と教員で共通していたのが、「付点4分音符」が出てきたところでつまずいたという点である。従来の教本であれば、「付点4分音符」は「8分音符」を十分理解させ、数曲の練習曲をこなした後に出てくる。しかし、「おとなのピアノ教本」では8分音符を学び2曲の練習曲を練習し、すぐに「付点4分音符」が出てくる。この時、8分音符が十分理解できないうちに付点4分音符に進むため、学生にとっては最初につまづくことになるのではないかと考えられる。

次に、教員が感じている「最初から両手で弾く」と「半音階」に関しては、学生はつまずいたとは感じていない。多少の難しさはあるのであろうが、さほど問題としてはいないようである。初めてピアノを弾く学生がいきなり両手で弾く時、すぐに弾ける学生と不器用で多少時間のかかる学生とがいるが、それをつまずきとは感じていないといえる。

また、指導者のみがつまずいたと感じている「半音階」に関しては、教本1の終了時にでてくる課題である。「半音階」の理解はそれほど難しいものとは思えないが、半音階を弾くという行為は難しいのではないと思われるが、学生自身はあまり感じていないようである。

次に、教員は学生がつまずいたと感じていないが、学生自身がつまずいたと感じているものが「8分の6拍子」「指の移動」「装飾音」「スタッカート」「教本1から2になった時」である。これらの課題は、ピアノ初心者が必ず理解しなければならない基本的な課題である。これらの指導では、指導者は丁寧に十分説明を行い理解させるよう努力する必要がある、初心者にとっては難しいということは承知している。しかし、教員は、これらの課題で学生が「つまずいた」と感じていることに気づいていないという認識のずれが明らかになった。

次に、この教本を使用した学生の感想を以下に示した。

- 1) 楽しみながら練習できた
 - 2) 練習すればすぐ弾けるようになる曲が多いので、楽しく練習できた
 - 3) 基本練習ばかりではなく、知っている曲が入っているので楽しめた
 - 4) コードネームを丁寧にやるので、弾き歌いの伴奏に役立つ
 - 5) 自分でもわかるくらい弾けるようになった
 - 6) 難しいと感じることが多かったが、やってよかった
- 一方指導者の感想は以下のようであった。

- 1) テクニックがつかない
- 2) 指を鍛える練習曲がないので、指のコントロールがつかない
- 3) 進度の幅が大きいので対応できない学生がいる
- 4) 従来の『大人のバイエル』、『学生ピアノ教本』の併用が望ましい

このように、ここでも、学生と指導者の認識に大きなずれがあることが明らかになった。

指導者である教員の感想は、かなりネガティブなものである。指導者である教員が一番問題視しているのが「テクニク」である。教員の考えるテクニクとは左右の指がそれぞれ独立して正確に動くこと、音楽表現をするための強弱やレガート奏法スタッカート奏法さらには細かいリズムが正確に弾けること、そしてきれいな音で弾けることなどである。これらは、もちろんピアノを弾く上で基本的な技術であり音楽表現にあたっては重要なことであり、当然のことながら指導者は、常にこれらの技術の習得を目指して指導している。

次に、学生の感想はすべてポジティブな感想であった。これは、習う側の学生とピアノを教える側の指導者との捉え方の大きな相違が浮き彫りとなる結果であった。

まず特筆すべき点として、「弾き歌いの伴奏に役立つ」というものがある。指導者は教えるのが難しいという感想であった「コードネーム」であるが、学生は、コードネームを習得したことで、スムーズに「弾き歌い」に移行できたようである。弾き歌いの伴奏は、ピアノが弾ければできるというのではなく、歌いながら伴奏を弾くということは、かなりレベルの高いものである。にもかかわらず、「コードネーム」を学ぶと同時にコードネームを使用した伴奏形およびそのバリエーションを丁寧に学習したことで、伴奏をつけるということに抵抗感を持つことなく、弾き歌いに移行できたと考えられる。

これは、保育者になることが目標の学生にとっては、もっとも重要なことである。従来の教本で学習した場合、1年生から2年生になり授業内容が「弾き歌い」になった時、苦勞する学生が多かった。しかし、大学に入学後初めてピアノを弾いた学生が、わずか1年間ピアノを学んだだけで、弾き歌いの伴奏に抵抗感を持たずスムーズに取り組めたことは、本来の目的から考えて重要なことといえる。

また、もう一点注目すべきことは、多くのつまづく課題があったにもかかわらず、「楽しみながら練習できた」「楽しめた」という感想である。

新しい課題になるたびに、うまくいなくて難しさを感じたりしながらも練習を繰り返すことで、知っている曲が弾けるようになっていく。その繰り返しは、ピアノが弾けるようになることが「楽しく」「うれしい」という思いになり喜びにつながったと考えられる。

そして、それは「やればできる」「自分にもできる」という自己変容の感覚を持つことになり、学生が大きな自信を持つことにつながっていくと思える。この感覚を、学生自身が身体感覚として認識するという経験を積み重ねることが重要である。これらを積み重ねる経験によって、「自分もピアノが弾けるようになった」という達成感を持ち、努力したことに対する満足感をあじわうことができると思われる。そして、これらの経験は学生にピアノを弾くことへの自己効力感をもたせることになると思われる。

この自己効力感について、伊藤³⁾は「一定の結果に導く行動を自らがうまくやれるかどうかという期待であり、その期待を自ら抱いていることを自覚したときに生じる自信のようなもの」と述べている。そして、速水⁴⁾は、自己効力感の源を失敗に耐えて向かっていこうとする心だとしている。

また、鈴木⁵⁾は、技能教科は「何とかできそう」「この方法ならうまくいきそうだ」という自信をもつこと、つまり自己効力感をもたせることが重要だと述べている。ピアノもまさに技能教科であり、ピアノを学習する上で非常に重要なことと考える。

ピアノの学習では、テクニックを身につけることは当然重要なことであるため、ピアノの指導では「どこまで弾けるようになった」「指がよく動くようになった」などテクニックの上達に重点が置かれる傾向にある。そこには「ピアノを弾くことが楽しい」とか「ピアノが弾けてうれしい」「自分はこんなに弾けるようになった」などの満足感や達成感を味わせるということが見落とされがちであったことは否めない。

ピアノを弾くうえで、もちろんテクニックの上達は重要なことであるが、原⁶⁾が言うように、保育者になろうとしている学生にピアノ指導する場合は、まず、学生に「ピアノが弾けるようになった」という達成感や満足感、さらにピアノが弾けるようになることの喜びや楽しさなどを早い時期にあじわってもらうことが重要であると考えられる。

5. 今後の課題

我々指導者は、技術を習得させる過程で、ピアノが弾ける喜びや達成感を持ってもらえることを考えないわけではない。しかし、ピアノを指導する教員はほとんどが音楽大学のピアノ科出身者であるということもあり、ややもすれば演奏技術を身につけさせることに偏る傾向がある。これは、指導者自身がピアノを学んできた過程に由来するところもあるのではないだろうか。保育者養成機関のピアノの授業であっても、正確な基礎技術を習得させ、すこしでもレベルの高い曲を弾かせたいという思いが強くなり、それによって学生は常にレベルの高い学生を追いかけていかなければならないことになる。スタート時

点で大きく差が開いているため、どこまで行っても追いつくことはできないにもかかわらず、追いかけることになる。これでは、学生はどんなにがんばっても満足感など得られることはなく、つねにジレンマを抱え劣等感と負担感に苛まれることになる。このような状態で多少弾けるようになったとしても、同級生より遅れているのは明らかで、満足感など得られるはずもなく、自己肯定感も得られないであろう。さらには焦りの感情から解き放たれることはない。

前にいる学生の背中を追いかけるのではなく、学生に現在の自分自身の評価基準を知らせることにより、自分自身がどのくらい弾けるようになったのか、上達したのかを自覚させることが肝心である。そして、それを積み重ねることにより、達成感や満足感が得られることになる。この小さな積み重ねを経験していくことによって、誰かとの比較ではなく、自分自身の進歩を感じることができ「ピアノが弾けるようになった」という喜びが実感できるのではないだろうか。それによって、「もっとピアノが上手になりたい」という思いが生じ、自主的に練習する意欲が高まり、練習する→弾けるようになる→さらに練習するという循環ができあがると考えられる。

今後、ピアノ未経験者および初心者学生のピアノ指導には、基礎技術の習得に偏ることなく、学生に達成感や満足感をもたせること、さらに自己効力感を育てることが重要であると考えられる。この自己効力感を育てることは、ピアノの学習のみにとどまらず、保育者になるためのあらゆる勉学へのモチベーションの向上につながっていくのではないだろうか。

文献

- 1) 橋本晃一：おとなのためのピアノ教本1・2，ドレミ楽譜出版社，2011.
- 2) 橋本晃一：同上
- 3) 伊藤崇達：学業達成場面における自己効力感，原因帰属，学習方略の関係，Japanese Journal of Educational Psychology, 44,340-349,1996.
- 4) 速水敏彦：自己効力感(セルフ・エフィカシー)とは何か，児童心理,64(16)，11,1281-1350,2010.
- 5) 鈴木聡：自信をもって取り組む意欲を引き出す鉄棒学習，児童心理，64(16)，11,1351-1388,2010.
- 6) 原浩美：保育者養成に応じたピアノ指導について，久留米信愛女学院短期大学紀要，34,51-57,2011.